ちのニーズ、関心、意欲、そういったものに応えるためには今のシステムではいけないので、違った方法を考える。そのためにはやはり、教師、親ですね、そして子どもたちがそういった教育に取り組むことができるような、そういう環境を何らかの形で、実験的といいますか、トライアルなベースで考えていくという発想を私は持ちたいと願っています。チャータースクールといわなくてもいいんですが、そういったことを真剣に考えていかないと、今の学級崩壊というのは解消しないのではないか、そんな懸念をもっております。

司会：ありがとうございました。

ご熱心な討議のあまり、すでに予定の時間を過ぎて、「ゆとり」が全然なくなりました。したがいまして、私のまとめはとりやめます。おそらく全体のまとめは、このセミナーを総合企画された、附属学校長である今津教授のあいさつで触れられると思います。

遠路はるばる私たちのセミナーにご参加くださいましたパネリストの先生方、それから時間を超過してお残りいただきましたフロアの皆様方に心からお礼を申し上げます。それから最後に、同時通訳の皆様に心からお礼を申し上げたいと思います。本当に今日はご苦労様でございました。これをもちましてセッションを閉じたいと思います。ご協力、どうもありがとうございました。（拍手）

……

閉会あいさつ

今　津　孝次郎（中等教育研究センター長）

1999年、中等教育に関する総合的研究の核として、全国の大学のなかでも唯一の「中等教育研究センター」が教育発達科学研究科内措置として設けられました。それから3年経って、本日こうして環太平洋6ヶ国による国際教育フォーラムを持てましたことは、教育発達科学研究科だけでなく中等教育研究センターのこれからの研究活動にとって大きな飛躍の踏み台となる、と大変うれしく思います。同時に私はこの4月から名大教育学部附属中・高等学校長に就任しておりまして、わが附属学校にとりましても、この国際教育フォーラムは実に貴重なものとなりました。授業の合間をぬって、総合司会を担当してくれた石川・仲田の両先生をはじめ、何人もの先生方がこの会場に参加していますし、保護者の方々も多数参加しています。受付でもお手伝いをしていただきました。6人の講演者の発表それぞれに多くを学びました。それらに個々にお話したいところですが、さらに20～30分はかかるでしょう。時間が大幅に超過していますので、二つだけ全体的な感想を短く申し上げます。

一つは、6人の先生方が話されたことは私達にとって実に身近で、共有しうるものがほんどであったことです。そして、教育改革にとって教師の役割が大きいと強調された点も含め、本日のフォーラムをスタートとして、これらいっそう共同で議論を続けていく必要性を強く感じました。

二つ目は、教育の理想とそれに向けた改革およびその実態を細かく再検討しなければならないことです。教育理想でいえば、「生徒中心」という基本方向が打ち出されました。しかし、中等教育段階において私たちは生徒中心の理想をどこまで追求できているか。この理想を実現するために、今の変動の激しい社会、すなわち国際化、情報化、市場経済化、階層化などの状況下で、改めて教育の理想と社会のあり方を充分に照らし合わせて、いかなる改革を具体化し、その実施効果をたえず検証しながら具体的な改革を見直していくことが重要であることに気づかされました。

貴重な報告と討議をしていただいたゲストスピーカーの６人の先生方、限られた時間のなかで難しい司会役を果たしていただいた二人の先生、そして同時通訳をはじめ、この国際教育フォーラムの準備や運営を支えていただいたすべての方々、会場に集まっていただいた多くの皆様に厚く御礼申し上げます。この名古屋で再会できることを切望してごあいさつとさせて頂きます。ありがとうございました。